

展望

〈うたげ〉のシニールレアリスム 小島なお

現実を克服し、超越しようと試みる心のリアリズムこそがときにシニールレアリスム、超現実の戦場詠に繋がっていったのではないかということを書きながら大岡信の『うたげと孤心』について思いだしていた。

「合す」意志と「孤心に還る」意志との間に、戦闘的な緊張、そして牽引力が働いているかぎりにおいて、作品は稀有の輝きを発した。私にはどうもそのように見える。見失ってはならないのは、その緊張、牽引の最高に高まっている局面であって、伝統の墨守でもなければ個性の強調でもない。単なる「伝統」にも単なる「個性」にも、さしたる意味はない。けれども両者の相撃つ波がしらの部分は、常に注視と緊張と昂奮をよびおこす。

「合す」とは、連歌や俳諧、歌合など協調と競争の両面を併せ持った〈うたげ〉の場に働く原理のこと。それはときに笑いの共有で

あり、心の交感でもあった。「孤心」とは、孤に向き合う心。孤の心を研ぎ澄まし、その心奥に深く沈潜してゆくこと。近代短歌以後の私性とも通う原理と言える。

そして〈うたげ〉の時代には〈孤心〉の求心力が高まり、〈孤心〉の時代には人々の機運はふたたび〈うたげ〉へ向かってゆく。おおまかに言えばそのくりかえしが短歌史を形作ってきたと言ってもいいのではないか。

たとえば『古今和歌集』の時代。この頃は、とくに上級貴族らのあいだでは和歌を漢詩文と比べて低く見なす風潮が色濃かった。けれど、藤原氏の摂関政治により後宮文化が発達し、女たちによって、『古今集』選者およびその他下級貴族によって、平安朝の和歌が興隆した。題詠や歌合の催しが流行したことで、遊戯的、技巧的な和歌が数多く生まれ短歌史をさらに彩った。

短歌は時代や歴史の要請と分かちがたく結びついている。定家の幽玄も、白秋の新幽玄も、茂吉の象徴も、戦場詠でさえもはるかな時間の満ち引きから逃れることはできない。

我妹子が額かみに生ふる双六の特負の牛の鞍うまの上の瘡かさ

我が背子が犢鼻たなこぎにするつづれ石の吉野の山に氷魚ひよこぞ懸有か

『万葉集』卷十六「無心所著の歌」、いわゆるナンセンスの歌二首。「うちのかみさんのおでこに生えている、あの双六で使う、牡牛の、その鞍の上のおでこでした」。「うちの旦那がふんどし代わりにする丸石、その丸石の軋こもがっている吉野の山に、氷魚がぶら下がっている」。歌意はあつてないようなものでまさに「心の著く所の無い歌」。舍人親王とねりのみことの「意味のつながりのない歌を作った者に物銭二千文をやる」という命に応じて安倍朝臣あべのあそみ子祖父が献じたもの。

謎や奇想を追求することは、意味を離れようとすると試みや、人を驚かせようとすると願望の表われである。そしてその欲求は自分が今生きている環境への挑戦であり、〈うたげ〉の時代ならば、歌を受け取るべき他者との場のへの挑戦でもある。表現する私たちの自我はいつの時代も自在に拡張する。どんな時も世界の事実を飛び越えて私の真実を獲得しようとして挑戦し続けるのだ。